

平成28年度「キャリア教育・就労支援等の充実事業」成果報告書

受託団体名	北九州市
-------	------

I 概要

1 モデル地域の概要

①モデル地域の種類 ※Ⅰ型、Ⅱ型、Ⅲ型のいずれかに○を付してください。

	Ⅰ型（連携型：特別支援学校高等部及び高等学校の連携）
○	Ⅱ型（単独型：特別支援学校高等部のみ）
	Ⅲ型（単独型：高等学校のみ）

②モデル校の一覧

設置者	学校種	課程又は障害種	学校名（ふりがなを付すこと）
北九州市	特別支援学校	知的障害	きたきゅうしゅうしりつとくべつしえんがっこう 北九州市立特別支援学校 きたきゅうしゅうちゅうおうこうとうがくえん 北九州中央高等学園
北九州市	特別支援学校	知的障害	きたきゅうしゅうしりつこくらきたとくべつしえんがっこう 北九州市立小倉北特別支援学校
北九州市	特別支援学校	知的障害	きたきゅうしゅうしりつこくらみなみとくべつしえんがっこう 北九州市立小倉南特別支援学校
北九州市	特別支援学校	知的障害	きたきゅうしゅうしりつやはたとくべつしえんがっこう 北九州市立八幡特別支援学校
北九州市	特別支援学校	知的障害	きたきゅうしゅうしりつこいけとくべつしえんがっこう 北九州市立小池特別支援学校
北九州市	特別支援学校	知的障害	きたきゅうしゅうしりつもじそうごうとくべつしえんがっこう 北九州市立門司総合特別支援学校

2 研究課題

生徒一人一人の課題改善を通して就業を継続する力を高める教育の充実
～個々の課題を日々の学習で改善し、就業を継続する力を育成する取組～

3 研究の概要

平成25年度卒業生の就業実態を追跡調査した結果、職場に馴染み、スキルアップしていく卒業生が多くいる一方で、離職したり、職場に馴染めなかったりするなどの問題を抱え、就業の継続が困難になった卒業生の存在が明らかになった。就業した後、安定して働き続けるためには、生徒個々の課題に応じてコミュニケーション能力、集中力・持続力等の「働く力」を身に付ける必要があることが分かった。そこで、研究の目的を「生徒一人一人に応じた就業を継続

する力を育成するため、全教職員が共通の視点をもって課題を焦点化する方法を明らかにし、課題改善に向けた授業実践を積み重ねること」とした。方法としては、実習における評価を整理・分析し、個々の課題に応じた手だてを工夫した授業づくりを仕組むようにした。モデル校の中には、アビリンピックの出場を掲げて課題に取り組む生徒もいる。個別の課題を焦点化した授業づくりを進め、その過程における手だての工夫等について成果をまとめることとした。

また、キャリア教育の視点にたち、「働く力」を身に付けるために、就労支援専門家の活用、産業現場等における実習や地域における体験活動、デュアルシステム型の実習の実施等、関係機関とも連携しながら、就業を継続する力を育成する研究を行った。

3年間の研究内容「キャリア教育の視点にたった個々の課題改善に向けた授業づくり」の成果は、指定校のホームページで公開するなど、取組の成果を共有したい。

また、北九州市立高等学校へ情報提供を行い、高等学校に在籍する発達障害のある生徒に対する支援について連携を図った。

4 研究の成果

本事業における中心的な取組は、就労支援専門家の活用である。就労を目指す高等部のみの北九州中央高等学園以外の他の特別支援学校にも、中学校の知的障害特別支援学級から進学する軽度知的障害の生徒が在籍する割合も増えてきており、それらの生徒に対する適切な進路指導と必要な支援を行うためにも、就労支援専門家の活用は、有効であったと考える。

特に、職業専門コースを設置して開校した門司総合特別支援学校においては、年度進行で作業学習の開設を行っており、次年度の開設準備として就労支援専門家を活用した取組を積極的に行ってきた。食品加工については、4月より生徒の作業学習がスムーズに実施できるよう、教室環境の整備、教材・教具、補助具、レシピ、指示書等の準備に関して助言を得た。専門家の立場からの指摘により、今後の整備の必要性も明らかとなった。

昨年度からの取組が継続したことで、各校において、積極的な授業改善等が図られている。他の学校の実績を参考とし、1年から3年までを縦割りとしたグループ編成を取り入れた「就労グループ」においては、「接遇」や「清掃」の作業学習を継続して取り組んでいる。生徒は専門家に指導を受けることで、緊張感をもって作業に取り組み、スキル向上のポイント等の理解を深め、成功経験を重ねることで、自信をもつ姿が見られた。就労支援専門家が適切なアドバイスを行うことで、生徒は主体的に物事を考えるようになり、教師は、その後の授業をどう行えばよいのか、指導方法や指導形態等の改善を図ることの重要性を認識することができた。

小倉南特別支援学校では2年間継続してビルメンテナンスの学習に取り組み、空港での実習を行った生徒は、採用に向けた特別実習の機会をつかみ、本人が希望する清掃業務での正式採用の通知を得ることができた。

また、挨拶やコミュニケーション等、実習先の企業等からも指摘される課題に対して、教科や作業学習と関連付けて指導したり、ビジネスマナーの視点で指導したりすることで、改善を図る生徒の姿も見られるようになった。

八幡特別支援学校では、市民センターで開催される「大人のサロン」で、喫茶サービスの演習に取り組み、対人関係能力を習得するために意義あるものとなった。就労支援専門家の助言や評価をもらったことで、実用的な動きを具体的に学ぶことができ、生徒自身が何をすればよいかが分かり、「いつ・どこで・何をすればよいか」を生徒自身が判断して動くようになってきた。さらに、3年生や2年生が1年生に対して現場でいろいろな指示やアドバイスをし、お互いをフォローする場面が多く見られるなど、技術や自信が着実に身

に付いてきた。接客業務を通して、仕事をする喜びを体感でき、自分にもできることがあるという実感をもつ生徒の姿が見られるようになってきた。

本市は、福岡労働局と「北九州市雇用対策協定」を結び、年度ごとの協定に基づく取組を行っている。平成28年度も、就労支援コーディネーターが、実習・就労の受入先確保のための労働局提供の職場実習受入候補者リストを有効に活用し、積極的に企業訪問を行い、新規開拓を図った。また、高等学校や大学等の学生を対象とした企業説明会の情報を基に、企業訪問も行い、障害のある生徒の理解啓発に努めてきた。

また、北九州地区障害者雇用連絡会議や北九州障害者就業・生活支援センター業務連絡会議等に参加し、関係機関に特別支援学校の現状や雇用促進セミナーの開催の連絡などを行い、協力依頼を図った。市内の企業関係者が所属する団体や公共職業安定所等とのネットワークを構築し、引き続き連携を図りながら、実習等の協力企業も増えてきている。

関係機関の開催する雇用面接会や職場見学会、作業学習の実演等を行う技能発表会や雇用促進セミナー、地域施設を活用した協力企業での実習等により、生徒は有用感や達成感を実感し、地域の方と触れ合うことでコミュニケーション能力や対人スキルの向上が見られるようになった。これら、継続した取組により、八幡特別支援学校においては、平成25年度6%であった就職率が平成28年度では30%を越えるようになってきている。

今後も、就労支援専門家を活用した計画的な取組、企業や関係機関等との連携を積極的に行うことで、生徒の意欲向上、就労へのイメージづくり、スキルの向上を進めていきたい。これらの取組が、障害のある生徒の職業的な自立につながり、生涯にわたって自立し、社会参加を果たすことになると考える。

5 課題と今後の方策

本年度も就労支援専門家の派遣を行ったことが、就労を意識した授業改善を行うきっかけづくりとなり、積極的に校外での体験活動等に取組が進み、生徒の就労への意欲の高まりやスキルの向上につながった。学ぶ姿勢や学んだことが定着し、働く力となるためには、校内で学んだことを校外実習等で試し、また、課題となった点を再度校内で学んでいくという双方向での学びを継続的に行っていくことが大切であることも確認できた。

昨年度からの取組の中で、地域の協力企業との連携を図り、着実につながりを深めてきているが、今後は、さらに協力企業数を増やし、地域資源を活用した積極的な連携を図ると共に、つながった関係団体等に広く生徒の実態等を公開し、実習等の継続した受入れのための広報活動を一層推進していく必要がある。その意味でも、就労支援コーディネーターが要であり、ジョブコーチとしての役割も担う必要がある。ジョブコーチが、一般就労を目指す生徒の実習等に同行し、実習中の援助を行うとともに、生徒の様子から就労に向けた課題等を把握する他、企業に対して障害のある人を雇用する際の環境整備や支援方法等の理解啓発を進めることも必要である。

小学部から高等部までの一貫した取組を進める中で、効果的な体験活動を取り入れ、自己有用感等を高めながら児童生徒が、将来の自己実現に向け、積極的な取組が実施できる組織的な体制作りも必要と考える。

今後も本事業における取組を生かし、就労を目指す生徒を支援するネットワークの更なる構築に向け、本市としての取組の充実を図っていきたい。

1 研究の内容

(1) 現状の分析と研究の目的

○ 現状の分析

- (1) 対象とする生徒は、知的発達の遅れは軽度だが社会適応力が未発達な生徒である。各学校においては、就業に向けて、一人一人の実態に応じた各教科等の学習や社会生活に必要な実践的な力を育成するための作業学習等に取り組んでいる。

年間に2回行われる産業現場等における実習後、企業から提示された生徒の個々の課題が、その後の作業学習や日常生活の中でなかなか改善されず、就業への可能性にも影響している。また、卒業生の就業実態を追跡調査すると、職場に馴染み、スキルアップしていく卒業生がいる一方で、離職したり、職場に馴染めなかったりするなどの問題を抱え、就業の継続が困難になった者もいる。それは、在学中に改善されなかった一人一人の異なる課題（例：コミュニケーション能力、主体性）が引き続き残ってしまったことが原因であると考えられる。

安定して働き続けるためには、在学中に生徒一人一人の特性や課題を更に焦点化し、それらの課題改善を通して、より細かな個々に応じた指導を行い、就業を継続する力を高めていくことが不可欠であることが分かった。

具体的には、実習評価表を活用した課題改善への取組や就労支援専門家活用による授業改善の取組等を通して、働くことを意識したり、働く力を身に付けることができるよう授業に取り組んだりする生徒の姿がみられるようになった。発達障害や心身症等の疾患等により、自己肯定感が低い生徒が将来への夢をもち、「企業就労」ということを意識できるようになってきていることが成果として挙げられている。しかし、学ぶ姿勢や学んだことが定着し、働く力となるためには、校内で学んだことを校外実習等で試し、また、課題となった点をまた校内で学んでいくという双方向での学びを継続的に行っていくことが大切であり、今後の課題としている。

- (2) 障害者雇用に協力的な企業等がある一方で、障害者雇用についての理解が地域全体になかなか広がらない状況もある。実習は受け入れるが、就労はできないという実態であり、その理由として、以下のことが挙げられる。

- ① 仕事の力量として考える基準をクリアしていない。
- ② 資格を持っていない。持っても活用できない（例：運転免許はあるが、業務としての運転を本人が拒否するなど）。
- ③ 会社の事情（雇用率を満たしている。決まった事業所（（就労移行支援事業所））から採用をしている。採用は本社人事が行っている。余裕がない（金銭的・人的）。等）

以上のことにより、多くの企業に雇用を受け入れてもらうためには、「働く力」を身に付けると共に、就労支援コーディネーターの活用やパンフレットの配布、関係機関との連携等を積極的に行い、障害者の就労についてのより一層の理解啓発を進めることが必要であることが分かった。

本研究においては、以下のとおり「働く力」を定義し、その向上を図ることとする。

- ・ コミュニケーション能力

- ・ 集中力、持続力
- ・ 社会人として適切な態度

○ 研究の目的

- (1) 生徒の課題を焦点化し、全教職員が共通認識をもつ方法を明らかにするとともに、課題改善に向けた授業実践を積み重ねることにより、生徒一人一人に応じた就業を継続する「働く力」を育成する。
- (2) 就労支援コーディネーターが企業等を訪問したり、関係機関との連携を強化したりすることにより、障害者についての理解啓発と進路開拓を行うことで、障害者雇用を推進する。

(2) 取組内容

①モデル地域における取組

- (1) 以下の各種会議への参加や関係機関等との連携を図った。活用会議名と内容を記す。

① 北九州地区障害者雇用連絡会議の活用

北九州地区における障害者の雇用の促進と職業の安定を図るための労働・福祉等の関係機関からなる連絡会議である。

7月の会議の際には、福岡県労働局職業安定部職業対策課障害者雇用担当官に今年度も「障害者の雇用促進」を目的とした施策推進に係る情報提供等の協力を求めた。

② 北九州障害者就業・生活支援センター業務連絡会議の活用

参加している北九州商工会議所や福祉関係者等に、産業現場等における実習や特別支援学校生徒雇用促進セミナーの参加など、生徒の自立と社会参加に向けた協力依頼を行った。また、今年度開校した門司総合特別支援学校と小倉総合特別支援学校についての情報提供を行った。

③ 北九州市立特別支援学校進路連絡会の活用

校長、進路指導主事・進路担当者、教育委員会指導部特別支援教育課が構成員となり、特別支援学校における適切な進路指導の充実に向け、関係機関等（保健福祉局障害福祉課）による情報提供や講話、産業現場等における実習の日程調整、確認等を行った。また、就労支援コーディネーターの積極的な活用・連携について確認を行った。

また、県主催の合同技能発表会や市主催の特別支援学校生徒雇用促進セミナーの開催等について連絡し、積極的な取組の推進をお願いした。

④ 障害福祉課等との連携

障害者就労支援室との打合せを必要に応じて行い、市主催の特別支援学校生徒雇用促進セミナーの企業へのチラシ配付や障害者就労支援センター（しごとサポートセンター）との情報共有を図ったりすることができた。

ハローワークとの打合せを必要に応じて行い、事業所面接会に向けた情報共有や特別支援学校雇用促進セミナーにおける企業等への情報提供等の依頼を図った。

⑤ 各種企業による関係団体との連携

北九州活性化協議会、中小企業家同友会、北九州高齢者福祉事業協会、ライオンズクラブ等の企業人による関係団体にセミナーへの参加依頼を行うとともに、産業現場等における実習や就労等、特別支援学校生徒の自立と社会参加に向けた協力依頼を行った。

(2) 教職員、保護者等対象の研修や見学会

① 障害者を雇用する企業等での教員の体験研修

北九州中央高等学園の赴任者は、夏季休業中に卒業生等を雇用する企業において「就業体験」を行っている。実際に体験することで、仕事の内容や仕事を遂行する上での問題点、生徒にどのような指導を行ったらよいかなど、ジョブコーチとしての視点も身に付けることができている。体験研修後は、校内の研修会において実践報告を行うとともに、卒業生の状況についても情報共有を行っている。他の特別支援学校においても、必要に応じて同様の取組を行っている。

② 特別支援学校の学校見学会

市内の特別支援学校において、中学校の生徒・保護者・教員等を対象に学校見学会を7月と12月に行った。

7月は、開校した総合特別支援学校の情報提供を行うとともに、中学校及び中学部の全学年を対象とし、早い段階からの適切な進路指導の充実を図ることを目的とした。12月は3年生を対象とし、各学校の障害種等による教育課程の違いを把握し、進路実現に向けた意欲の向上を図るようにした。

(3) 生徒を対象とする見学会や面接会

① 障害者就労支援センター（しごとサポートセンター）による北九州市障害者就労プロモーター事業「障害者職業能力見学会」に生徒・保護者が参加し、企業の状況等を把握することができた。

② 11月には、福岡県教育委員会主催、福岡労働局主催による合同技能発表会が北九州高等学園で、1月には北九州市教育委員会主催による特別支援学校生徒雇用促進セミナーを北九州市立総合体育館にて開催し、企業関係者を対象に、作業の実演や実践発表を行った。

市主催のセミナーに市内の知的障害の特別支援学校6校（門司総合特別支援学校は見学）が参加し、43社の企業が参加した。今年度は、公共職業安定所をしごとサポートセンター職員による企業への情報提供を行った。障害のある生徒の雇用の状況や就労後のサポート等について話を聞くことで、今後の実習や就労に向けた理解啓発を図ることができた。

③ 福岡労働局、公共職業安定所、本市教育委員会が主催する「特別支援学校を対象とした職場実習のための事業所面接会」を開催した。

事前学習として、事業所についての理解促進や面接の取組を計画的に行った。その際、「社会生活学習」の時間に招聘した講師から学習した内容を想起しながら、面接練習に取り組んだ。選考に漏れたとしても実際に企業面接を体験し、いかに自分をアピールすればよいか等、今後の課題に気付く機会となった。

(4) 就労支援コーディネーターの活用

教育委員会に所属する就労支援コーディネーターを活用し、障害のある生徒の就労先・就業体験先の開拓、各学校進路担当者との連携を図った。

関係部局や関係団体等とも連携を図り、必要な情報交換や情報提供等を行い、障害のある生徒の理解啓発に取り組んだ。

(5) 就労支援専門家の活用

対象とする特別支援学校に就労支援専門家を派遣し、指導助言を通して、職業教育の充実を図るとともに、生徒の実態に応じた作業学習等の実践的指導力を高め、授業改善を図った。

活用が継続的に行われることで、北九州中央高等学園以外の特別支援学校でもアビリンピックへの出場を果たし、生徒が自信をもって物事に取り組む姿が見られるようになった。

②モデル校における取組

(1) 産業現場等における実習評価を基に、生徒に行った手だてとその後の変容

① 校内実習・産業現場等における実習と、自己評価・他者評価を記入する実習評価表の作成と活用

北九州中央高等学園では、課題改善に焦点を当てた授業実践を実施するために、課題改善シートを活用した。生徒一人一人の課題の中で、実習評価表で明らかになった課題を整理し個々の中心課題を焦点化した。

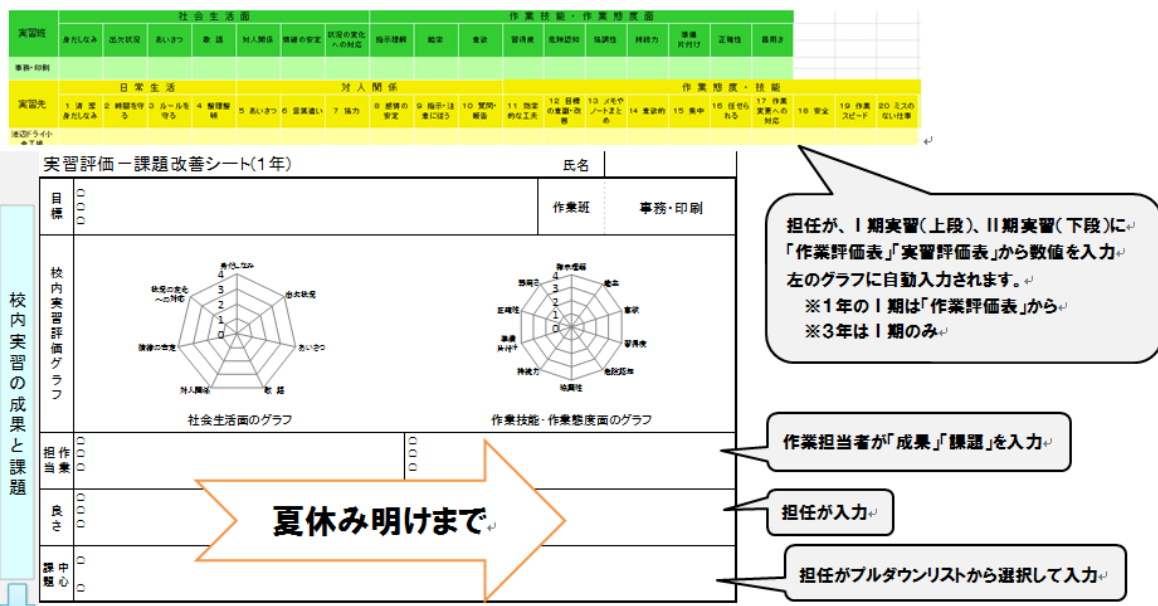
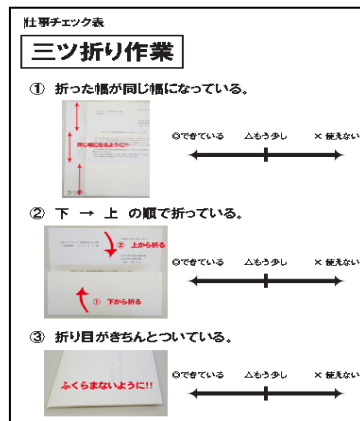


図1 実習評価—課題改善シート例

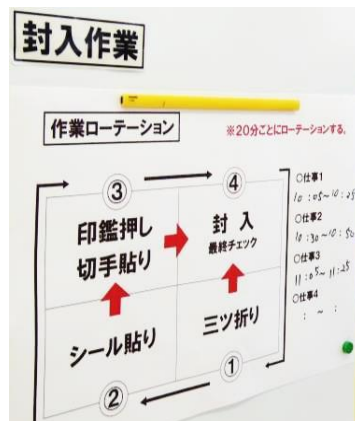
＜事務印刷班：みんなで封入作業をしよう＞

対象生徒4人は、課題改善シートから、責任をもって積極的に仕事に取り組むことと、報告、連絡、相談など仕事に必要なコミュニケーションを身に付けることが課題としてあげられた。そこで、「①割り当てられた仕事に責任をもち、集中して取り組む。②積極的に取り組む。③大きな声であいさつや返事をする。④場面に応じた適切な方向・連絡・相談をする。」の4つを単元で取り組む生徒の中心課題とし手だてを講じて取り組んだ。

手だて①の仕事チェック表により、作業手順を確認すると同時に、作業のできを自分で確認しながら取り組めるように工夫した。手だて②のタイムシフトでは、本来は一人で全ての行程を行う封入作業を4つの役割に分け、協力して行うようにした。手だて③のチームの封入の目標数と個人目標の設定では、受注した仕事として責任感をもつことを意識させるようにした。手だて④のコミュニケーションカードを机の上に置くことによって、場面に応じた報告や質問に迷わず、指示待ちや不安の軽減につながるようにした。



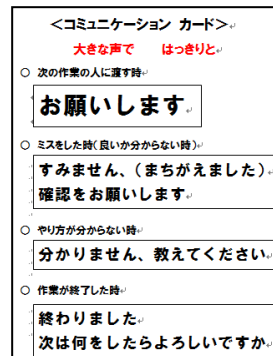
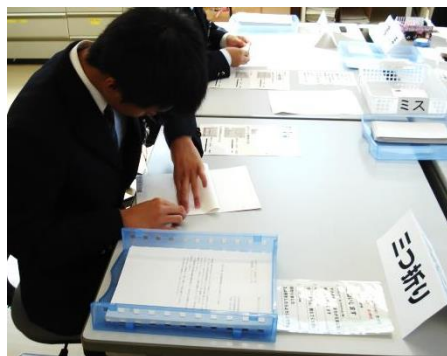
【手だて①】



【手だて②】



【手だて③】



【手だて④】

仕事チェック表の活用で、ミスが減り、一人で正確な作業ができるという自信につながった。仕事をローテーションすることで、チームで仕事をするという自覚が高まり、自分の仕事に責任をもつことができるようになった。また、見通しをもつことで、集中力を高めることができた。コミュニケーションカードの活用によって、コミュニケーションが苦手な生徒も、自分から進んで報告や質問ができるようになった。

八幡特別支援学校では、実習に参加する生徒全員を対象に、実習 3 か月前に進路指導主事と担任、保護者、本人での懇談を行い、その中で、本人の「めざす将来像」を語らせ、実習における目標設定と意欲の確認をするようにした。

実習 2 週間前から実習開始までを事前学習期間と定め、1 日 3 時間を「進路に関する学習」とし、実習先で必要とされる技能や態度を養うために、繰り返し取り組ませ、意欲付けを行った。そのことで、一人一人が実習の目標を意識し、事前学習の時から、目標達成に向けシミュレーションできるようにした。

実習終了後は、1 週間以内に、実習評価を基に、進路指導主事と担任、本人で、振り返りの時間を設定し、「目標が達成できたか」、「達成できた要因は何か」、「達成できなかったとしたら課題は何か」、「次に向けた目標は何か」等、生徒本人が実習の成果と課題を振り返りシートにまとめるようにした。この振り返りの際に、目標や達成の要因、課題などを自分のことばで語ることで、生徒自身の意識付けができ、その後の日々の学校生活や家庭生活に反映できるようにした。

実習後の課題として、一日働く体力、意欲、人との関係づくり（連絡・報告、笑顔）、公共交通機関の利用などをあげた生徒は、地域ボランティア清掃やサポート企業での研修実習等を重ねることによって、意欲的に取り組む姿が見られるようになった。

また、進路に関する学習の中で週3時間の基礎トレーニング（ビルメンテナンス、喫茶サービス）を中心に取り組んだ。特に課題である対人スキルについては、喫茶サービスの接客（市民センター「大人のサロン」）を経験することによって、意識のもち方が変わってきた。人と人とのやり取りを通じて、相手の立場に立って考えることや、相手の要求を受け止めることができるようになることを意識した取組が、産業現場等における実習につながり、働くことへの意欲付けを継続することができた。学校で学んだことを地域で生かし、試すことで働くことが具体的なイメージにつながった。

小倉北特別支援学校では、実習後の事後学習で、実習先からの成果と課題を「他者評価」として本人に自覚させた。成果は自信となり、それを積み重ねることで、働く力のアップにつながった。課題は具体的に確認させることで、その後の学習で修正していくよう指導した。評価内容については、実習後に情報交換会を開き、学部職員全員で共通理解を図った。特に課題については、その後の授業や学校生活の様々な場面で改善に取り組んだ。

前期実習で、肥料工場で実習した生徒は、「生活習慣」や「健康と安全」「作業態度」「体力」「社会参加」の領域において高評価となったことで、本人の意識が大きく変わった。「働く」ことへの自覚をもって、学校生活を送る姿が見られ、課題であった「社会生活」の領域の責任感や自発性、就労意欲も向上した。その成長は後期の実習先であるクリーニング工場でも評価され、雇用が確定した。

コミュニケーションに自信がなく、企業就労に積極的でなかった生徒は、しごとサポートセンター主催の「職場体験会」をきっかけに、企業就労への意識が高まった。更に夏休みの特別実習を経験し、「作業態度」や「生活習慣」で高い評価を得たことが自信につながり、「社会参加」や「体力」といった課題の修正にも自ら積極的に取り組んだ。後期実習の後、更に特別実習として行った企業実習では、特に「作業態度」の評価が常に高かったことから、雇用につながった。

小倉南特別支援学校では、福祉事業所が行う多様なサービスに対応するため、実習評価表の様式を大きく「入所」と「通所」の2様式に分け、さらに「通所」に関しては、生活介護、就労移行・継続と企業の4種類を準備した。実習中の活動内容に即して評価が可能となった。

本生徒は、中学校校の知的障害特別支援学級を卒業後、本校に入学した療育手帳B2を所持する軽度知的障害の生徒で、言語理解力は比較的高い。

本人が希望する清掃業務での就労に向け、2年より就労支援専門家を活用したビルメンテナンスの学習に取り組んだ。3年の後期産業現場等における実習では、空港清掃の実習を行い、一般企業での客観的な評価に基づいて自分の実習を振り返ることができた。実習先からの具体的な指摘により、取り組む姿勢にさらなる改善がみられ、採用に向けた特別実習の機会をつむことができ、正式採用通知を得ることができた。写真1 空港内での実習



② 関係機関や企業と連携した取組

北九州中央高等学園においては、年2回の定期実習の実習出発会や報告会に卒業生の就労先企業等の人事担当者から生徒や教職員、保護者に講演を行い、雇用側の視点を具体的に知り得る機会を設定した。

赴任者には、夏季休業中に「就業体験」を行い、実際に実習先や就労先の企業等において1日体験することで、仕事の内容や仕事を遂行する上での問題点、生徒にどのような指導を行ったらよいかなど、ジョブコーチとしての視点も身に付けることができた。

小倉北特別支援学校では、ハローワーク主催の職場実習のための事業所面接会から企業実習に結び付いた。段ボールの積み上げ作業に向けて、事前学習では毎日20kgの荷物を運ぶ練習を行った。体力を要求される職場で、8時30分から17時までのフルタイムでの実習をやり遂げたことから、企業就労も可能であるという評価を得た。



写真2 肥料工場での作業

肥料工場で実習をした生徒は、その評価を受けて、雇用も視野に入れた企業での実習に臨むことができた。前期実習での経験が自信となり、学校生活の様々な場面で、自ら進んで取り組もうとする意欲や態度が見られた。その成長はクリーニング工場での実習でも発揮され、時間いっぱい黙々と働く態度や、分からないことは自分から聞くなどの様子が見られ、高い評価を得て雇用に結び付いた。

また、ある生徒は、事前学習として、清掃とベッドメイキングの練習を積み重ね実習に臨んだ。

初めての場面では緊張が強く、自分から積極的に動くことが苦手な生徒であったが、2週間の実習を経験したことで意識が変わった。1回目の実習が自信となり、別の高齢者介護施設でも実習することができ、実習の結果、雇用に結び付いた。



写真3 クリーニング工場での作業



写真4 ベッドメイキングの事前練習

(2) キャリア教育の視点に立ち、個々の課題改善に向けた授業づくり

① 地域の教育資源を活用し、就労グループの効果的な授業づくりに取り組んだ八幡特別支援学校

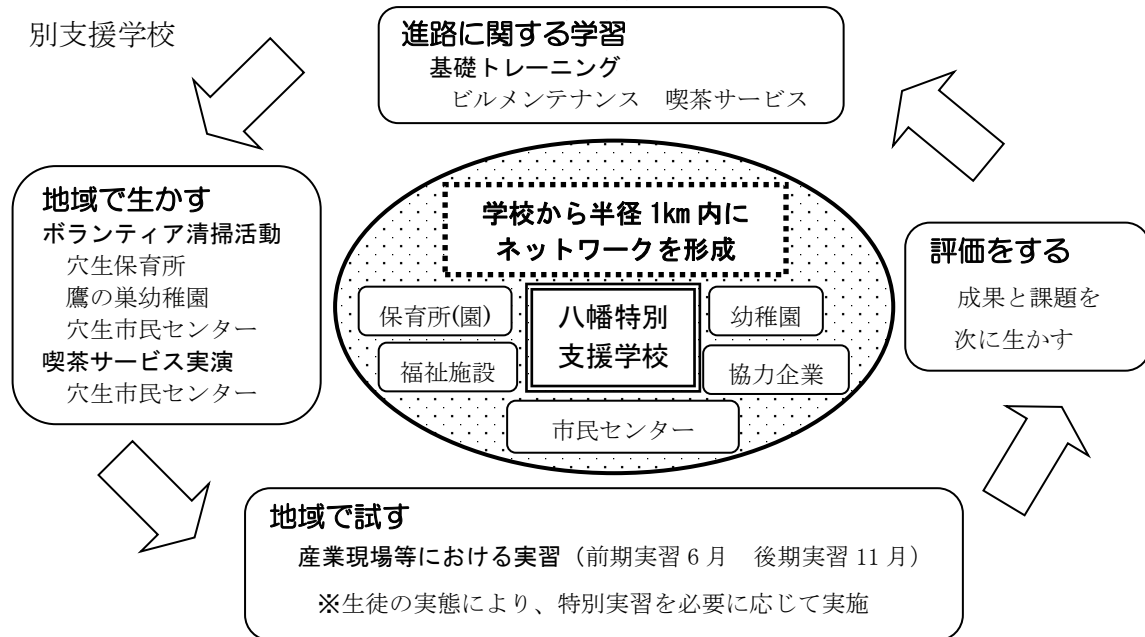


図2 地域の教育資源を活用した取組

高等部入学後の早期から、企業就労の可能性や希望を把握し、将来の就労を意識した教育活動充実の一環として、近隣に位置する企業開拓に努め、生徒の実態に応じて、1年生からの特別実習に取り組んだ。

<進路に関する学習>

八幡特別支援学校では、個々のニーズに応じた具体的・効果的支援を行うため、教科等を合わせた指導として「進路に関する学習」の時間を設けた。

○ 目標

- ・ 個々の能力に応じ、将来（卒業後）必要とする働くための力を伸ばす。
- ・ 自立と社会参加に必要な能力としての生活する力、余暇を楽しむ力、公共機関を利用する力等や態度を身に付ける。

○ 指導時間 毎週金曜日 2～4校時

○ グループ編成

高等部1～3年までの縦割りで、次の4つのグループを設定している。

進路1（将来、就労に必要な力を付ける）

進路2（働くことを中心に、社会参加のために必要な力を付ける）

進路3（できる仕事を増やし、余暇を楽しむ力を付ける）

進路4（支援を受けながら楽しく生活する力を付ける）

○ 「進路1グループ」の対象生徒

卒業後、企業に就職もしくは、就労移行支援を受けて卒業後数年以内に企業就職を目指そうとする生徒及び就労継続支援A型に進む生徒を対象としている。

「進路1グループ」の対象生徒は、次の要件を基に学年・学部で検討の上、決定している。

- ・ 障害の程度が軽度で療育手帳B2又はB1を所持する者

- ・ 本人と保護者の希望
- ・ 担任が推薦する者

平成 28 年度の対象生徒は、1 年生 7 名、2 年生 7 名、3 年生 8 名の計 22 名である。

○ 「進路に関する学習一進路 1 グループ」の指導目標

- ・ 卒業後の進路を見据えて、働く意味をしっかりと理解できるようにする。
- ・ 勤労意欲、集中力、持続力の向上を図る。
- ・ 生徒自らの能力を最大限に発揮し、自己実現できるようにする。

○ 平成 28 年度も年間計画をたて、取り組んだ。

I 基礎トレーニング（ビルクリーニング）

○ ビルクリーニング導入の意義

- ・ 近年、清掃関係又は清掃を伴う企業で産業現場等における実習をする生徒が増えてきており、卒業後の就労につながる作業種としてのニーズが高い。
- ・ 作業内容は多種で、用具や道具(機材)も多様である。よって、興味・関心や作業能力など、生徒の課題に応じた目標や作業内容が調節できる。
- ・ 作業を繰り返し行うことができ、知識の理解、技能の向上、作業態度の定着を図ることができる。また、それらの到達度を確認しやすい。
- ・ 集団作業も設定でき、作業を分担して行うことで自分の責任を重んじること、協力し合うことで責任感や協調性のある人間関係を築くことができる。
- ・ 時間内に完結できる作業であり、すぐに結果が出るため、見通しが付きやすく、生徒は達成感が得やすい。

○ トレーニングの内容

- ・ ウェスタオルの使い方 ・ 自在ぼうき、文化ちりとりの使い方
- ・ ダストクロスの使い方 ・ モップの使い方
- ・ スクイジーを使った窓ふき



写真 5 ビルクリーニングトレーニングの様子

○ キャリア教育の 4 観点から見た目標

人間関係形成能力	○ 個々の清掃場面における自分の役割を理解し、他者と協力して清掃に取り組む。 —自他の理解能力とコミュニケーション能力—
情報活用能力	○ ビルクリーニングという職業の概略を理解し、使用する清掃用具やその効率的な使い方を知る。 —職業理解能力と情報収集・探索能力—
将来設計能力	○ ビルクリーニングの方法を身に付けることによって、将来の社会生活に必要な知識や技能を取得する。

	—自分の将来の認識能力・将来に向けての役割把握— ○ 就労に向けて、この学習がどの場面で役立つか、自らシミュレーションを立てる。 —計画実行能力—
意思決定能力	○ 使用する清掃用具の判断やそれらを使った清掃方法を決定する。また、選択の判断や決定の結果には、責任が伴うことを理解する。 —選択能力— ○ 個々の卒後の進路に向け、この学習で自ら課題を設定してその解決に取り組む。 —課題解決能力—

Ⅱ 基礎トレーニング（喫茶サービス）

○ 喫茶サービス導入の意義

- ・ 物との関わりが多い卒業生の就職や進路先に比べ、「接客—喫茶サービス」は、人（お客様）との関わりが主であることに大きな意義がある。
- ・ 「接客の仕事」には、人と人とのやりとりを通じて相手の立場に立って考えたり、その要求を受け止めたりできるようになるという「キャリア教育」的機能が含まれている。すなわち、「大きな声でしっかりと返事・挨拶・報告をする」、「清潔な身だしなみを心がける」「きちんとした姿勢を取る」、「マナーを守る」などである。
- ・ 「接客の仕事」は、知的障害のある生徒にとってアプローチが難しいと言われていた自己表現力を育てる新たな動機付けにもなると考えられる。

○ トレーニングの内容

- ・ 喫茶サービスの心得（挨拶、服装、基本用語）
- ・ 服装、髪型といった身だしなみの確認
- ・ お客様をお迎えするまでの待ちの姿勢
- ・ お辞儀（会釈、敬礼、最敬礼）の仕方
- ・ サービストレイの基本的な持ち方
- ・ 姿勢や腕の角度を意識した歩き方の確認
- ・ タンブラーとカップの持ち方と置き方
- ・ お出迎え、席への案内の仕方
- ・ お冷の出し方、注文の取り方
- ・ 注文品のオーダーの仕方、注文品の出し方
- ・ 注文確認の仕方、伝票の渡し方、見送りの仕方
- ・ 片付けの仕方



写真 6 喫茶サービストレーニングの様子

○ キャリア教育の4観点から見た目標

人間関係形成能力	○ 喫茶サービスにおける個の場面で自分の役割を理解し、他者と協力して接客に取り組む。 ― 自他の理解能力とコミュニケーション能力―
情報活用能力	○ 喫茶サービスという職業の概略を理解し、接客用語や接客技術の正しい使い方を身に付ける。 ― 職業理解能力と情報収集・探索能力―
将来設計能力	○ 喫茶サービスの方法を身に付けることによって、将来の社会生活に必要な知識や技能を取得する。 ― 自分の将来の認識能力・将来に向けての役割把握― ○ 就労に向けて、この学習がどの場面で役立つか、自らシミュレーションを行う。 ― 計画実行能力―
意思決定能力	○ 使用する言葉の判断やそれらを使った言葉遣いを決定する。 ― 選択能力― ○ 個々の卒業後の進路に向け、この学習で自ら課題を設定してその解決に取り組む。 ― 課題解決能力―

<地域で生かす>

○ ボランティア清掃活動

日頃のビルクリーニングの学習を生かして、夏季休業期間中に、地域のボランティア清掃活動を行った。

活動場所は、本校の近隣にある穴生保育所、鷹の巣幼稚園、穴生市民センターの3か所で、施設の窓ふきや床みがき、園庭の除草などに取り組んだ。



写真7 穴生保育所・鷹の巣幼稚園での清掃活動の様子



写真8 穴生市民センターでの清掃活動の様子

○ 喫茶サービス演習

穴生市民センターで毎月第4月曜日に開催されている「大人のサロン」において、喫茶サービスの演習に取り組んだ。

- ・ 参加生徒：進路に関する学習―進路1グループの生徒
1年7名 2年7名 3年8名 計22名

- 実施日：平成 28 年 5 月、7 月、9 月、10 月
平成 29 年 1 月、2 月 計 6 回
- 当日のスケジュール
 - 9:10 本校玄関前集合
通学服で出発し、穴生市民センターで
ユニフォームを着用
 - 9:20 会場準備、喫茶コーナー設置
 - 9:40 喫茶サービス開始
 - 11:20 後片付け
 - 11:40 学校着



写真9 穴生市民センターでの喫茶サービスの様子

<地域で試す>

○ 前期・後期産業現場等における実習

	実施時期	実 施 内 容
前期	6 月 13 日 (月) ~ 6 月 24 日 (金)	1 年生 校内実習 2, 3 年生 校外実習
後期	11 月 7 日 (月) ~ 11 月 18 日 (金)	1 年生 前半 校内実習 後半 地域のサポート企業での実習 ※ 進路 1 グループを中心に、前期実習や夏季休業期間中の 地域ボランティア清掃などに意欲的に参加した生徒を対 象として、計 8 名について実施した。 2, 3 年生 校外実習

○ 地域活用型の特別実習

実施時期	実 施 内 容
4 月 3 日間	菓子販売店 2 時間/日 包装、シール貼り、箱折り
8 月 12 日間	飲食店 5 時間/日 食器洗浄、野菜の下準備
12 月 7 日間	スーパーマーケット 4 時間/日 商品の前出し、荷出し
12 月 7 日間	麺製造卸業 6 時間/日 製麺作業補助

※ 幼稚園、保育所、市民センター等地域での清掃活動の取組は、八幡特別支援学校以外にも小倉南特別支援学校、小倉北特別支援学校、門司総合特別支援学校、北九州中央高等学校園においても実施されており、地域貢献に役立っている。

※ 地域での接遇活動の取組は、八幡特別支援学校以外にも小倉南特別支援学校でも行っており、北九州中央高等学園については、自校の地域交流室（喫茶室）においても実施されており、地域との連携を図っている。

【ボランティア清掃を行い、一般就労のできた生徒の履歴書（志望動機一部抜粋より）】
（清掃業務）

- ・清掃の仕事が好きです。私は、これまで小倉南幼稚園などでボランティア清掃をしてきましたが、清掃をするたびに職員の方から「ありがとう」と感謝され、そのことで清掃するのが好きになり、もっときれいにしたいという気持ちになりました。

（介護職）

- ・お年寄りが好きで、人に喜んでもらえる仕事がしたいと思って志望しました。2年の実習で言葉遣いが丁寧だ、笑顔がいいとほめてもらい、思ったよりも積極的に会話ができ、介護職への関心が生まれました。

② アビリンピックへの参加を目指して作業学習に取り組む特別支援学校

北九州中央高等学園は、生徒一人一人に作業学習の技術向上と働くことの意欲付けを行うため、毎年アビリンピックへ参加している。校内予選・県大会・全国大会へと発展していくため、アビリンピックに参加することが生徒全員の目標となっている。そのためには、正しい技術の取得と向上が必要不可欠である。就労支援専門家の活用は、講師の都合等もあり、毎時間指導を受けることは難しい。アビリンピックの概要理解、生徒の技術の振り返りのために、講師の実演等を動画に撮り、視聴しながら繰り返し練習を重ねた。講師や先輩の実技を見ることで、具体的な技術向上のための目標を設定することができた。また、校内予選を行う際は、就労支援専門家が来校し、専門家の目を見た客観的な審査を行うことで、生徒の作業学習に向けての意欲をさらに向上させることにつながった。

今年度は、小倉南特別支援学校の生徒が就労支援専門家の活用を継続した結果、ビルメンテナンスの部門でアビリンピックに参加することができた。

③ 就労支援専門家を活用し、職業教育の充実を図った特別支援学校の取組

小池特別支援学校では、27年度より企業就労を希望している生徒を対象に就労支援専門家として派遣したベネッセの方よりパソコン指導を受けている。27年度は、昼休みの活動としての位置付けで、自分でデザインした名詞を作成することでパソコンの操作に慣れ親しんだ。本年度は、「国語、数学、自立活動」の時間に数学1のグループの生徒、すなわち企業就労を希望している生徒を対象に自立生活ができるための学習の一環として指導を行った。

学習内容はエクセルで「おこづかい帳」をつくることとパワーポイントを使って自己紹介をすることだった。

表作成の中で学習したことは、セルの結合や解除の仕方。オートフィル機能を使って日付を増やす方法。関数を使っての計算の仕方である。作成したおこづかい帳に、レシートの内容を項目ごとに入力することも学習した。



写真 10 指導をうける様子

この学習後に行われた、産業現場等における実習で、実際に通勤寮での所持金の管

理をパソコンで行ったり、実習先での仕事として行なった事務作業がスムーズに行えたりと生徒の活動にとっても役に立った。

「パワーポイントを使って自己紹介しよう」では、自分で選んだ写真や絵、文字の位置を考え、伝えたい相手のことを考え、てアニメーションをつけた。スライドショーを使って、内容を確認した後。友達や先生の前で自己紹介を行なった。

パソコンに触れる機会が増えたことでパソコンが生徒の身近なものになり、パソコンでできる作業を系統立てて学習できたことにより、学習した内容の理解と習得につながった。生徒たちは、自信をもってパソコンに向かい合っていると感じた。



写真 11 作成したパワーポイントを使って自己紹介をする様子

【学習後の生徒の感想】

- ・パソコンが勉強できることは、楽しかった。実習の時の事務作業がスムーズにできたので、自信をもって実習に取り組めた。
- ・最初は難しかったけど、自己紹介のパワーポイントができてとてもうれしかった。
- ・もっとパソコンを使いこなしたい。(自分の写真でスライドショーを作ったりなど)パソコンでどんなことができるのか、たくさん知りたい。

八幡特別支援学校での喫茶サービスの授業においても就労支援専門家を有効に活用した。

第2回目の授業の中で生徒は、喫茶サービスが働く力の一つであるということを改めて学んだ。喫茶サービスの一連の説明を受け、喫茶サービスとはどのようなものであるか、講師の話聞き、動き方を見ることで把握した。特に1年生の生徒は、初めて受ける講師の話や動きに集中していた。

第一印象の作り方「笑顔の作り方」では、講師から人と関わる時に他人は4分間でその人の印象を決めてしまいがち（初頭効果）であることと、お客様が再び行きたいお店を選ぶ中に、大多数の人が店員さんが顔の表情や声を重視しているということを学んだ。出会ったときの瞬間や感じを大切にするため、お互いの身だしなみをチェックシートをもとに生徒同士で確認しあった。

笑顔トレーニングでは、接客サービスにおける笑顔の大切さを伝え、笑顔の有無によってその場の雰囲気になどどのような違いがあるかを考えさせた。ホワイトボードに描かれた三種類の顔（おこってる、ふつう、えがお）を見せ、口角が少し上がった顔は、「ふつう」の表情でも笑っているように見え、口角が少し上がった状態で話すと、相手が話しやすいなと感じる。接客するときの普通の表情(標準装備)であることを視覚的に学習した。次に口角を上げるトレーニングとして、まず生徒たちが割り箸を受け取り、横にして歯だけで1分間口にくわえ続けた。こうすることで表情筋が鍛えられ

て、1 ヶ月くらいで口角が上がってくるとの説明を受け、生徒たちもお互いの表情を確認し、講師の助言を受けながら取り組んだ。

身だしなみチェックシート

(店頭に立つ前に鏡の前でチェックしましょう！)

男性			チェック
髪	・	ボサボサ・バサバサではありませんか？	
	・	ヘアクリーム・ワックスのつけ過ぎでベタベタになっていませんか？	
	・	ひげの剃り残しはありませんか？	
顔	・	顔や唇が乾燥していませんか？(適度に油分を補いましょう！)	
	・	口臭はきつくないですか？(ブレスケアをしましょう！)	
	・	つめはのび過ぎていませんか？	
体	・	手や指先は清潔ですか？	
	・	ワキの下の臭いは大丈夫ですか？	
	・	香水の匂いはきつ過ぎませんか？ ★ 飲食店では香水はつけない！ (特に雨の日匂いがこもるので、ほんのり香る程度にしましょう！)	
洋服	・	★ 今日の仕事・お会いするお客様に適した服装ですか？	
	・	しわしわになっていませんか？	
	・	汚れやほつれはありませんか？	
	・	ポケットが膨らむほど、物を入れていませんか？	
	・	ネクタイは緩みがなく、きちんとしめていますか？	
	・	靴は磨かれていますか？	

【発声練習】

あえいうえおあお	かけきくけこかこ
させしすせそさそ	たてちつてたと
なねにぬねのなの	はへひふへほはほ
まめみむめもまも	やえいゆえよやよ
られりるれろらろ	わえいうえをわお
がげぎくげごがご	ざぜじずぜぞぞ
だでぢづでどだど	ばべびぶべぼぼ
ぱべびぶべぼぼ	

女性			チェック
髪	・	ボサボサ・バサバサではありませんか？	
	・	ヘアクリーム・ワックスのつけ過ぎでベタベタになっていませんか？	
	・	茶髪になりすぎていませんか？ (まだ茶髪は不潔感を与えます！)	
顔	・	メイクはしていますか？(ノーメイクはNGです)	
	・	メイクは濃すぎませんか？(特にアイシャドウ・口紅をチェック！)	
	・	顔や唇が乾燥していませんか？(適度に油分を補いましょう！)	
体	・	口臭はきつくないですか？(ブレスケアをしましょう！)	
	・	つめはのび過ぎていませんか？	
	・	マニキュアの色が濃すぎたり、はげていたりしませんか？	
洋服	・	手や指先は清潔ですか？	
	・	ワキの下臭いは大丈夫ですか？(夏・ノースリーブの時は要注意です！)	
	・	香水や化粧品匂いはきつ過ぎませんか？ ★ 飲食店では香水はつけない！ (特に雨の日匂いがこもるので、ほんのり香る程度にしましょう！)	
洋服	・	★ 今日の仕事・お会いするお客様に適した服装ですか？	
	・	しわしわになっていませんか？	
	・	汚れやほつれはありませんか？	
	・	ポケットが膨らむほど、物を入れていませんか？	
	・	ストッキングは破れていませんか？(背面からもチェック！)	
	・	アクセサリーはつけ過ぎ・派手過ぎではありませんか？	
洋服	・	靴は磨かれていますか？	

お線や母親に おあやまりなさい
瓜売りが瓜売りに来て 瓜売り残し 売り売り帰る 瓜売りの声
この釘の杭は引き抜きにくい杭
最新式写真撮影法
中小商工振興会議
隣の客はよく持食う客
生麦 生米 生卵
坊主が障風に上手に坊主の絵を描いた
お前の前髪 下げ前髪

図 3 身だしなみチェックシートと発声練習表

「会話のポイント」では、挨拶とは「挨拶」心を開いて「挨拶」相手に迫る、という意味を伝え、まず発声練習表に沿って声を出し、早口言葉で滑舌をよくするトレーニングを行った。「う」と「い」の発声練習を繰り返して発声する「ういうい運動」を 1 日 1 分間することで、表情筋が鍛えられ口角が上がってきて「笑声(えごえ)」になってくることを知った。生徒たちの声量も授業時間中の練習で大きくなっていった。接遇用語とは、相手に余計な誤解をさせないための言葉であり、失礼のない言葉を選ぶことである。お客様との大切なクッション言葉として、簡単な丁寧語、謙譲語、尊敬語の学習をした。

どの場面でも講師は、生徒たちの様子を全体的に見て、指導助言を行った。その間、教師は、動き方があまりつかめていない生徒や不安定な生徒に対し、直接指導を行った。お互いのチェック場面では 3 年生が 1 年生を確認する姿が見られた。



写真 12 就労支援専門家を招いての喫茶サービス演習の様子

その後の「正しいお辞儀の仕方」の学習では、姿勢には会釈、敬礼、最敬礼の 3 種類があることを講師の動きで構造化して示した。ポイントは簡単な説明を板書で示すと、生徒は模倣するときにお辞儀の角度を意識していた。

「サービストレイの持ち方」では、まず生徒は持ち方、立ち方、歩き方を確認した。実際にサービストレイで飲み物を運ぶ講師の動きを見て、どのように行うのかを視覚的に学習した。講師は、生徒の様子を全体的に見て、指導助言を行った。その間、教師は、動き方があまりつかめていない生徒や歩き方が不安定な生徒に対し、直接指導を行うなど講師と連携しながら個別の指導に当たることができた。

門司総合特別支援学校では、職業専門コースに清掃・福祉、食品加工の2つの作業学習を、生活学習・作業学習コースに、農園芸、木工、紙工、手工芸の4つの作業学習を設定した。第1学年のみの在籍となる平成28年度は、清掃・福祉、農園芸、木工、紙工の4つの作業学習を開設した。他の作業学習については、次年度以降の開設とし、本年度をその準備時期とした。

職業専門コースの生徒を対象とした清掃・福祉の作業学習では、就労支援専門家を年間40時間活用した。

指導は、清掃作業を行う際の基本的な心構えに始まり、床や机上、窓の清掃に必要な資材や機材の使い方及びメンテナンスの仕方、場面に応じた効率的な清掃の進め方など、多岐に渡るものであった。学習の積み重ねにより、技能を身に付け、



自信を深めた生徒は、校内各所での応用の清掃作業や近隣幼稚園への出張清掃作業にも取り組んだ。生徒たちは、身に付けた技能や態度をさらに確実なものにするとともに、感謝されることによる達成感や自己有用感を感じることができた。

現在、生徒たちは、来年度のアビリンピック福岡県大会出場に向け、専門家の指導を受けながらビルメンテナンス技能のさらなる向上を目指して練習を積み重ねている。

食品加工の作業学習は、パン・菓子製造及び喫茶販売を計画し、平成29年度からの実施を予定している。本作業学習に必要な設備や大型備品等については、校舎の建築設計段階から計画されてきたが、昨年度及び本年度の備品等購入予算にも計上し、計画的に整備を進めてきた。

ア 食品加工実施に向けた環境整備等の準備

平成29年4月から生徒が作業学習に取り組むためには、実際の作業を想定した教室環境整備等の準備が不可欠である。そこで、これらの準備のために、パン・菓子製造に関して就労支援専門家の指導・助言を得ることとした。

年間約80時間にわたって支援を要請し、作業工程の計画や、教材・教具、補助具、レシピ、指示書等の準備に関して助言を得た。不足している備品や器具類についても専門家の立場から指摘があり、その整備の必要性も明らかになった。また、ミキサーやデッキオープンなど、パン・菓子製造に必要な設備や機械の初期設定、試運転及びその調整に関する助言や、担当教師によるパン・菓子の試作研修への助言も得ることができ、来年度への着実な準備を進めることができた。

イ 食品加工作業の見学・体験

写真13 ダストクロス清掃の様子

職業専門コースの1年生を対象として、来年度から始まる食品加工の作業学習に見通しをもつことができるようにするため、本校のパン工房での作業を見学する機会を設定した。2名の専門家に、合わせて10時間の支援を要請し、パン生地計量、分割、丸め、発酵、整形、焼成の工程を実演してもらった。生徒は、見学だけでなく、袋詰めなど一部の作業を体験することもできた。

食品加工の作業に従事するためには、何よりも衛生面への注意が必要なこと、機械等の使用に当たっては安全への配慮が必要なことなどを学び、次年度からの作業学習に意欲を高めることができた。



写真 14 オープン使用上の注意説明を聞く様子

④ 実際の生活場面に活かせる実践的な力を育成する社会生活学習

門司総合特別支援学校の職業専門コースにおいて、基本的生活習慣、健康安全、公的機関活用、経済生活、コミュニケーション、余暇活動などの職業や家庭の教科内容のほか、専門教科である福祉、サービスの内容を合わせて指導した。

ア 福祉用具プラザ北九州（介護実習・普及センター）を利用して

福祉用具プラザ北九州は、本人や家族、施設従事者等を対象とした介護講座や研修(実習)等を行う施設で、福祉用具やモデル住宅の展示・体験利用、介護や福祉用具に関する相談対応を行っている。

本校では、職業専門コース1年生の入門期における学習として、当施設の協力を得ながら2回の介護講座を受講するようにした。講座では、介護の基礎に関する講話の他、高齢者疑似体験や福祉用具の見学・試用を行うなど、基礎的な事項や心構えについて学習した。



写真 15 高齢者疑似体験の様子

イ 高齢者介護施設からの出前授業を利用して

軽費老人ホーム「ケアハウス好日苑」の協力を得て、介護の仕事に関する出前授業を受ける機会を設定した。これは、北九州市保健福祉局が実施するキャリア教育事業の一環としても取り組まれたものである。

当日は、介護の職場の様子について、施設側から提供のあったDVDを視聴し、施設の雰囲気や仕事の概要を学んだあと、車椅子介助やリネン交換の体験、高齢者疑似体験などを、施設スタッフ（10名）の支援を受けて具体的に学習した。



写真 16 リネン交換体験の様子

小池特別支援学校では、週 4 時間ある生活単元学習の 1 時間を高等部三年間を通して、計画的、系統的に社会人になるための学習に取り組んだ。学習の内容、グループ編成等は、「社会人になるための学習指導計画」を参考に、各学年で考え実施していった。内容としては、基本的生活習慣や電話のかけ方、銀行の利用や異性との付き合い方等である。通帳の作り方、履歴書の書き方等内容によっては、国語や数学、自立活動の時間と併せて指導をすることもある。学習内容により、学年全体、小グループ（2～3 人）に分かれるなど授業形態を変え、より生徒の実態に応じた学習になるように試みていった。

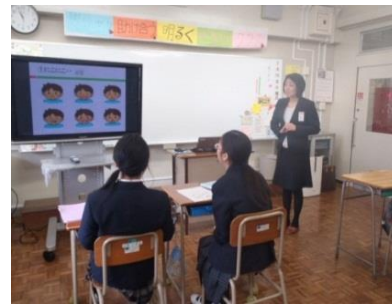


写真 17 社会生活学習の様子
学習内容により、学年全体、小グループ（2～3 人）に分かれるなど授業形態を変え、より生徒の実態に応じた学習になるように試みていった。

社会人になるための学習の一環として、デパートに所属する就労支援専門家を活用し、「社会人になるためのマナー」の学習を行った。内容としては、挨拶、返事、接客方法のマナー、コミュニケーションの基本、身だしなみ等である。卒業後の自分をイメージしながら実態に応じて取り組んだ。

また、小倉北特別支援学校では、しごとサポートセンターの副所長に外部講師として、「働く力」について指導を受けた。

「自己」と「他者」の意識をもつことが必要であることを中心に、自分を知ってもらうことの重要性や他者との関係をどのようにもつかということを学んだ。



写真 18 「働く力」の授業の様子

具体的には「自分を知ってもらう自己紹介」、「他者とのコミュニケーションの基本であるあいさつの仕方や距離間の取り方」、「他者を意識した社会人としての身だしなみ」の 3 点を具体例や実践を交えながらの指導であった。

日頃の「進路に関する学習」やその他の学校生活において指導されていることではあるが、実際に就労支援に携わっている外部講師の指導で、生徒たちには深く意識に残る授業となり、成長につながった。特に 3 年生においては、実際にしごとサポートセンターに見学に行き、講話を聴くこともでき、卒業後の社会参加や生活をより現実的に捉えるよい機会となった。

⑤ 継続的に働く力を身に付けるための外注作業を取り入れた小池特別支援学校

職業的作業では、以下の 3 グループ編成をし、将来の社会生活（仕事）を意識した縦割りの活動を実施した。

職業的作業 1 → 将来、企業就労等を目指す生徒対象

職業的作業 2 → 将来、福祉就労を目指す生徒対象

職業的作業 3 → 生産的な活動を自分のペースで取り組む生徒対象

1、2 グループは、民間企業よりタオルのセット作りの仕事を請け負い、1 グループは休憩時間を取らず 140 分の作業をすることで、企業で 8 時間も継続して働くことができる力を付けることを目標としている。2 グループは、休憩時間を設定し、休み時

間に仲間と適切なコミュニケーションを取ることができる力を付けることも目標としている。ともに、民間委託の作業のため、丁寧かつ期限内に製品を作りあげなければいけないと意識しながら、作業に取り組む姿が見られた。

⑥ 小中学部が高等部の作業学習に参加等を行う小倉北特別支援学校

小学部から高等部まで、全ての学年で「働く力」「生きる力」の基礎力として、毎日の「朝の運動」の時間を設けている。

小学部6年生による中学部体験学習では、中学部の朝の運動と作業学習に参加した。事前学習を計画的に行うことで児童もスムーズに体験学習に参加することができた。

中学部3年生は高等部の作業学習への体験を行っている。「陶芸班」「園芸班」「手芸班」「木工班」の4つの班をローテーションを組んで全て経験することにより、高等部での生活が実感できた。



写真 19 小学部の児童

「高等部に入ったら〇〇班の仕事がしたいです。」と言った発言も聞かれ、体験が終わった後の、中学部での作業の時間にも真剣に取り組むなどの成長が見られた。



写真 20 中学部の生徒

また、高等部の実習報告会に参加することで、高等部の実習を知るだけでなく、事業所の様子や先輩の働く姿を映像で見ることで、より具体的に進路を考える機会となっている。

(3) 関係機関等との連携

○ 事業所面接会等への参加

本市では、年4回の事業所面接会や職場見学会が開催されている。

月	主 催	利用生徒数
10 月	八幡公共職業安定所（雇用面談会）	3 年生（1、2 年生見学）
12 月	しごとサポートセンター（職場見学会）	1、2 年生
2 月上旬	しごとサポートセンター（職場体験会）	1、2 年生
2 月下旬	八幡公共職業安定所	1、2 年生

面接会や見学会の事前の取組みとして、生徒への説明、保護者への連絡、面接の事前練習を行い生徒の意欲喚起及び意識化を図った。見学に参加した生徒は、雇用面接会の会場の雰囲気、面接者の受け答え、他校の生徒の様子を見て刺激を受けてきた。

職場見学会では、職業能力開発校や地元企業の様子を見学することで、漠然としていた就労への希望が具体的なものになり、職種や仕事内容などの希望を自分の言葉で語ることができるようになった。



写真 21 雇用面談会の見学及び職場見学会の様子



写真 22 職場実習面接会の事前練習と面接会当日

【参加した生徒の感想】

- ・緊張したけど大きい声ではっきりと言えたので、合格できることを願いたい。質問されたことが答えられたので嬉しかった。今日のことを生かしながら学校生活を送りたい。
- ・練習が足りなかったけど、とてもやりがいがあった。初めて面接をさせてもらい、アピールの写真を見せたり、メモを取ったり、質問したりなど、いろんなところができなかった。このことを反省して、次の面接ができたらいいと思った。

○ 「合同技能発表会」「特別支援学校生徒雇用促進セミナー」に向けた取組

福岡県・北九州市では、特別支援学校高等部の生徒が、日頃学習し、習得した職業技能を企業の方々の前で発表する「合同技能発表会」、「特別支援学校生徒雇用促進セミナー」が平成 26 年度より開催されている。本年度は、門司総合特別支援学校は、1 年生のみの在籍のため、見学を行い、その他の知的障害特別支援学校 5 校が昨年度に引き続き一堂に会して実施することができた。

事前の取組として、生徒への説明、保護者への連絡、発表練習を通して、生徒の意欲喚起及び意識化を図った。

練習場面では、授業と同じように 3 年生が 2 年生に教える場面が多く見られ、発表会当日は大勢の企業関係者を前に臆することなく堂々とした姿で発表することができた。報道関係の取材にも自分の言葉で答える 3 年生の姿に成長を感じることができた。



写真 23 雇用促進セミナーでの学校紹介と実演

【見学した生徒の感想】

- ・いろいろな特別支援学校の発表を見て、自分がしている清掃やアピリンピックの発表もあり、人に見せる清掃は全然違うなと思った。喫茶サービスもあり、お客様への接客などを見ていて、とても感じがよくて、素早く丁寧に行動していてすごいなと思った。あと、笑顔はとても大切なんだと思った。
- ・中央高等学園の発表では、声もよく出ていて道具の使い方も丁寧で、すごいなと感じた。私が苦手なダストクロスもうまく、むらなくしていたので、もっと上手になりたいなと思った。学校生活では、大きな声であいさつ、返事が言えるように頑張っていきたい。人前で立って発表がもっとできるようにしていきたい。

(4) 就労支援コーディネーターの活用

「研究の方法等 ②就職支援コーディネーター等の配置」にて具体的な内容を記す。

(3) 研究の方法等

①就職支援ネットワーク会議等の設置

A 北九州地区障害者雇用連絡会議

ア 構成委員

No.	所属・職名	備考
1	北九州東・西労働基準監督署・次長	
2	北九州人権擁護委員協議会・委員	
3	福岡障害者職業センター北九州支所 障害者職業カウンセラー	
4	北九州市保健福祉局障害福祉部障害福祉課・係長	
5	北九州市立精神保健福祉センター・保健師	
6	学校法人 産業医科大学・人事課長代理	
7	北九州市障害者基幹相談支援センター・主査	
8	北九州市障害者就業・生活支援センター・所長	
9	北九州市発達障害者支援センターつばさ・相談員	
10	北九州市教育委員会・指導主事	
11	北九州市立特別支援学校・教諭	
12	公共職業安定所・総括職業指導官	
13	福岡県福祉労働部労働局新雇用開発課・主事	
14	福岡県労働局職業安定部職業対策課・障害者雇用担当官	

B 北九州障害者就業・生活支援センター業務連絡会議

ア 構成委員

No.	所属・職名	備考
1	福岡県労働局職業安定部職業対策課・障害者雇用担当官	
2	福岡県福祉労働部労働局新雇用開発課・主事	
3	北九州市保健福祉局障害福祉部障害福祉課・係長	

4	北九州市立精神保健福祉センター・主任 保健師	
5	公共職業安定所・総括職業指導官	
6	北九州市障害者基幹相談支援センター・主査	
7	北九州市障害者就業・生活支援センター・所長	
8	北九州市発達障害者支援センターつばさ・相談員	
9	北九州市立戸畑障害者地域活動センター・職業指導員	
10	北九州市教育委員会・指導主事	
11	北九州市立特別支援学校・進路担当主事	
12	北九州市ひきこもり地域支援センター・センター長	
13	北九州若者サポートステーション・副所長	
14	きく通勤寮・事業所長	
15	北九州商工会議所	

C 北九州市立特別支援学校進路連絡会

ア 構成委員

No.	所属・職名	備考
1	特別支援学校・校長	
2	特別支援学校・進路担当者	
3	北九州市教育委員会 課長、指導主事、就労支援コーディネーター	

イ 会議開催回数・検討内容

NO.	開催日時	会議等名称	検討内容
C-1	4月26日 10:00	第1回進路連絡会	「障害者総合支援法」について - 障害者サービス等利用計画
C-2	7月15日 10:00	第2回進路連絡会	- 前期実習の反省 - 情報交換
B-1	7月15日 13:00	第1回北九州障害者就業・生活支援センター業務連絡会議	- 平成27年度事業報告 - 平成28年度事業進捗報告 - 各関係機関の意見・情報交換他
A-1	7月15日 15:00	北九州地区障害者雇用連絡会議定例会	「障害者雇用の現状について」 - 障害者基幹相談支援センターの役割や取組について - 各関係機関の意見・情報交換他
C-3	9月28日 9:30	第3回進路連絡会	- 相談支援専門員の役割と教育の連携について - 合同技能発表会及び特別支援学校生徒雇用促進セミナーについて

			・ 情報交換
C—4	2月 7日 10:00	第4回進路連絡会	・ 後期現場実習の反省 ・ 平成29年度産業現場等における実習予定 ・ 情報交換
C—5	3月 16日 10:00	第5回進路連絡会	・ 年間反省と平成28年度の進路状況 ・ 平成29年度進路連絡会日程案等検討
B—2	3月 24日 13:00	第2回北九州障害者就業・生活支援センター業務連絡会議	・ 平成28年度事業進捗報告 ・ 各関係機関の意見・情報交換他

ウ ネットワークの構築による効果と成果

効果・成果等	今後必要な事項
福岡県労働局雇用担当官に本事業の説明をし、「障害者の雇用促進」を目的とした施策推進に係る情報提供や協力依頼を行ったことで、雇用状況等の分かる事業所リストを受け取ることができた。企業訪問時にスムーズに話を進めることができ、企業開拓の大きな力となっている。セミナーの開催に当たり、関係企業へのチラシ配布等に活用することができた。	知り得た情報を基に、就労支援コーディネーターが企業訪問を行うとともに、各特別支援学校に情報提供を行っている。実習は可能だが、就労には結び付くことが難しいため、今後も情報提供を要望し活用を図っていく必要がある。 既存の連絡会議等は今後も活用を図っていくべきではあるが、組織としては大きいため、事業等の実施の際には、関係部局に協力を求め、実施に向け必要に応じた会議を行うようにしている。
北九州障害者就業・生活支援センター業務連絡会議において、本事業の説明をし、実習・就労に関わる企業・福祉関係等への協力、将来を見据えた通勤寮やグループホーム等の利用など積極的な関わりについて協力依頼を図ることができた。	今年度もつながった企業が所属する関係団体等との連携強化を図ることが必要である。
市内の企業が所属する関係団体とのつながりを結ぶことができた。 各種団体の会議等に参加し、特別支援学校の紹介や生徒の実習等への協力依頼を行うことができた。市で開催したセミナーにおいては、関係団体からの情報提供で参加した新規企業も多く見られた。	セミナーを複数回開催し、内容を工夫するなどして、特別支援学校生徒のさらなる理解啓発を行っていきたい。

②就職支援コーディネーター等の配置

ア 人数及び経歴・所有する資格等

就職支援コーディネーター数（1人）

コーディネーター	経歴・所有する資格等	勤務形態
A	平成25年度より本市としては初めて企業経験者を採用した。所有する資格はないが、営業に長く携わってきた経歴を有す。	1日7時間30分勤務

イ 本事業における活動内容

コーディネーター	活動内容
A	① 就労先・就業体験先の開拓 ② 特別支援学校進路担当者への情報提供 ③ 就業体験時の巡回 ④ 企業訪問時の卒業生の状況把握 ⑤ 学校訪問による生徒の実態把握 ⑥ 企業情報の管理 ⑦ 関係機関との連携

ウ 関係機関や教職員との連携に係る工夫点と成果

工夫点	成果
ハローワークとの連携の一貫として、特別支援学校の進路状況を伝えた。	求人情報について、企業状況を詳細に確認することができた。
障害者就労支援センター（しごとサポートセンター）との連携の一貫として、プロモート事業等に必ず参加した。	企業の情報を得ることができ、実習につながった。参加した生徒や保護者の実態を把握するとともに関係者との情報共有を図ることができた。
市内の企業が所属する関係団体とのつながりを継続するため、情報交換を図った。	関係団体との結びつきを継続することで、会議等に参加し、特別支援学校の紹介や生徒の実習等への協力依頼を行うことができ、理解啓発を進めることができた。 高等学校や大学等の就職相談会等の情報提供を受けたことで、就労支援コーディネーターが新規の企業開拓に向けた積極的な対応を図ることができた。

2 研究仮説の検証

研究仮説	検証の結果
産業現場等における実習において実習先の企業等からの評価を整理・分析し、 ① 生徒一人一人の課題を焦点化し、その課題を職員で共有するとともに、 ② 明らかになった課題の改善に向け、手だてを工夫した授業づくりを仕組んでいくことにより 生徒一人一人に必要となる就業を継続する力が育成される。 また、地域内の関係機関や団体等との連携強化を図ることで、就労先の確保や特別支援学校による就職後の定着指導の充実が可能となる。	実習評価表を基に、進路指導主事、担任、保護者、本人で懇談を行い、職業適性や就労に対する態度等の課題を明確化し、保護者と連携した取組、就労支援専門家の活用等就労を意識した授業改善を行ったことで、生徒一人一人が「働くこと」を具体的にイメージすることができた。また、地域での勤労体験を重ね、様々な方とふれあうことによって、コミュニケーション能力や対人スキルの向上が見られた。 また、地域内の関係機関や団体等に情報の提供を積極的に行うことで、連携強化が図られ、実習先の確保や今後につながる企業への理解啓発ができた。

3 研究の成果

就労を目指す高等部のみの北九州中央高等学園以外の特別支援学校にも、中学校の知的障害特別支援学級から進学する軽度知的障害の生徒が在籍する割合も増えてきており、それらの生徒に対する適切な指導と必要な支援を行うためにも、関係機関や企業団体等との連携、就労支援専門家を活用した取組等は、有効であった。

(1) 生徒一人一人の課題を焦点化し、その課題を職員で共有する取組

各特別支援学校においては、将来への本人の希望、生徒の実態等を考慮して、実習先を決定し、実施してきた。産業現場等における実習を終えた後は、関係職員と生徒、保護者による振り返りを行ってきた。

北九州中央高等学園においては、毎日「課題克服ファイル」に自己評価と担任からの評価を行い、記録の累積を行ってきた。取組の状況を可視化することで、具体的な目標設定と実行の手がかりとなり、意欲的に課題克服に取り組むことができた。

他の特別支援学校においても、実習評価表の記入等について、より適切な指導や支援に生かせるように必要に応じて個別に指導することで、その後の学校生活や家庭生活において、課題克服を生徒自身が意識できるようになってきた。

各学校においては、定期の実習後には実習報告会を行ってきた。実習報告会の中で生徒一人一人がそれぞれの成果と課題を発表することで、自分自身の成果と課題を明確に把握できるようになってきた。また、その過程において、進路担当教師から適切なアドバイスを受けることにより、常に課題を意識し、毎日の学校生活に臨む生徒が増えてきた。

(2) 明らかになった課題の改善に向け、手だてを工夫した授業づくり

北九州中央高等学園では、実習後の評価を「課題改善シート」を基に整理・分析すると、「質問、報告、相談、日常会話」や「あいさつや返事」「人の話や指示を聞く」など

のコミュニケーションに関する課題が見られるため、国語科で「コミュニケーションの能力を高める」ための取組を継続して行っている。音読・スピーチ・コミュニケーションスキルのポイントの学習を生徒の実態を踏まえて行ったり、ホームルームの時間等も活用する等日常的に注意喚起を行うことにより、実習評価にも向上が見られた。

また、本事業における中心的な取組である就労支援専門家の活用を図ったことで、各特別支援学校では、作業学習の充実が図られた。

小倉北特別支援学校では、生徒の障害の多様化で、企業就労を目指す生徒への専門的な指導の機会を設けることが課題であったが、本事業における就労支援専門家の活用により、課題の解決ができた。平成 26 年度から連続して就労支援専門家による指導を取り入れたことによって、生徒の実態を把握したよりきめ細やかな指導を実施した。

しごとサポートセンター副所長による授業では、日頃より「進路に関する学習」を中心に指導してきた「働く力」について再確認できた。特に 3 年生にとっては、これから自分たちが出ていこうとしている社会で、就労の支援を実践している方からの指導で、卒業後の社会参加や生活をより現実的にとらえるよい機会となった。

地域との連携においては、本年度初めて隣接する市民センター・子ども文化会館との連携で、清掃ボランティアを行った。1 年生の時から就労支援専門家の指導を受け、身に付けた清掃技術が地域で生かされ、感謝されることによって自信と充実感を味わうことができた。地域の方々にも特別支援学校での取組を知ってもらう絶好の機会となった。

特別支援学校生徒雇用促進セミナーには、生徒による実践という形で初めて参加したが、学部・学年の協力、また地域の福祉作業所の協力も得て、校内実習で行っている実際の作業の様子を見てもらうことができた。生徒たちにとっては、目標とする企業就労に向けて意識も高まり、日常生活でのあいさつや態度、作業に対する姿勢などに変化が見られた。

小池特別支援学校では、市主催の「特別支援学校生徒雇用促進セミナー」の参加に当たって、参加する 2 年生の激励会を行った。後日、報告会を開催しセミナーの様子や感想を発表した。一連の取組を通して、日頃人前に出る機会の少ない生徒も、多くの人の前で緊張しながら実演を行ったということが自信につながり、積極的に活動に関わるようになっていたり、卒業後「成幸（それぞれ幸せな人生を送る）」するために様々な学習活動を頑張ろうという学部全体の雰囲気が高まったりといううれしい変化が見られた。

高等部で働く力として捕らえている「清潔第一」「返事報告を元気よくする」「ミスなく優しく丁寧に取り組む」は、働くための技能として間違いなく大切なものであるということが、直接事業に参加した生徒だけでなく、報告を聞いた高等部全員で確認できた。日々の学習で自分たちがやっていることは間違いのないという自信となり、清潔さを保つ為に汗を拭いたり手を洗ったりすること、学校生活の中での挨拶や返事をはっきり行うこと、作業の道具を大切に扱ったり指示をよく聞いて仕事をするなど働くために必要な行動が自発的に行えるようになってきた。

八幡特別支援学校では、進路に関する学習において、就労グループで基礎トレーニング（ビルメンテナンス、喫茶サービス）を中心に学んだ。昨年同様地域貢献活動により、学校という学習環境のみでは得られない勤労体験をするとともに、地域の方とふれあうことでコミュニケーション能力や対人スキルの向上がみられた。

就労に向けた地域施設の活用システムを考えた背景には、就労する力をもちながら自己肯定感は低く、意欲に乏しく、自信がもてない生徒が多くみられたからであった。この活用システムを初年度から体験した3年生は、全員が一般企業へ就職することができた。

「1年目は、暑くて大変だなと思った活動だった。2年目は、だんだんやる気になってきた。3年目は、喜んでもらって、必要とされていることが分かった。やってよかった。」

「地域ボランティア清掃のお陰で力がついたと思う。」など、自己有用感と達成感をどこかで実感できている感想を聞くことができた。学校では得られない勤労体験をし、地域の方とふれあうことでコミュニケーション能力や対人スキルの向上もみられた。

サポート企業での研修実習は、就労意欲が高まり、自信につながり産業現場等における実習に向けてのステップにもなった。地域と連携した取組は、生きた教材であり、力をつけてもらえる場所であると確認することができた。

小倉南特別支援学校においても、地域資源を活用した実践に取り組むことができた。

この実践を進めることで、生徒の就労に対する意欲と基本的な社会生活スキルが向上してきた。地域貢献活動や産業現場等における実習では、日頃の学校での学習だけでは得られない勤労・就労体験による働くことへの意識付けや、取組に感謝されることでの意欲付けにつながった。

各学校ともに、生徒の実態を踏まえ、就労に向けた授業内容の工夫、地域資源の活用等、学習内容や活動内容などを充実させてきたことが、コミュニケーション能力の向上、自己有用感の高まりなど、就労を目指す生徒の「働く意欲」と「働く力」の定着を図っていくことにつながったことを確認することができた。

(3) 関係機関を活用した取組より

本市は、福岡労働局と「北九州市雇用対策協定」を結び、年度ごとの協定に基づく取組を行っている。平成28年度も、就労支援コーディネーターが、実習・就労の受入先確保のための労働局提供の職場実習受入候補者リストを有効に活用し、積極的に企業訪問を行い、新規開拓を図った。

また、北九州地区障害者雇用連絡会議や北九州障害者就業・生活支援センター業務連絡会議等に参加し、企業情報やネットワークにおける積極的な連携について、協力依頼を図った。市内の企業関係者が所属する団体との連携も図ってきた。学校がある地域の近隣企業が、協力企業として常時、実習等の受入を行ってもらえるようしくみづくりを構築することが生徒の意欲を向上させるとともに、障害のある生徒の職業的な自立につながり、社会参加を果たすことにつながることがこの事業の取組からも見えてきた。

4 評価計画

評価計画	結果等
・ 企業や事業所訪問件数・開拓件数等の比較	・ 労働局提供の職場実習受入候補者リストの有効活用や関係企業団体等との連携により、新規実習受入企業の増加を図ることができた。
・ 学校公開、研修会に参加した企業・事業所へのアンケートの実施	・ 特別支援学校生徒の実演等を行ったセミナーに参加した企業からは、非常に訓練をしている姿に

	感動し、実習受入れについての前向きな回答を得ることができた。企業講話が参考となり、企業における仕事の見直し等を行うという意見も見られた。
・ 教職員へのアンケートの実施	- 本事業を実施し、就労支援専門家等を活用したことで、教員自身の授業における実践的指導力が高まり、専門的な見地から生徒の継続した指導が行えた。 - また、教師が企業等に雇用されるために必要な能力と企業が必要と考えている内容には、差異がないため、継続した支援を学校教育活動の中で、適切に行うことが必要であることが分かった。
・ 就労支援ネットワーク会議における評価	昨年度に引き続き、既存のネットワークを活用するとともに、関係企業団体等との連携を図った。就労支援コーディネーターが窓口となり、つながりを深めることができた。

5 研究の課題と今後の方策

障害のある生徒に就業による社会参加と自立を目指す指導・支援を行うことは学校の責務である。学校は就労支援機関や相談機関等と密接に連携を図るとともに、企業等の協力を仰ぎながら、就業先や実習先の開拓に努めており、生徒の「働く力」や「働き続ける力」を身に付けるようにするため、積極的に授業改善を進めてきた。

本年度も就労支援専門家の派遣を行ったことによって、就労を意識した授業改善を行うきっかけづくりとなり、積極的に校外での体験活動等の取組が進み、生徒の就労への意欲の高まりやスキルの向上につながってきた。しかし、学ぶ姿勢や学んだことが定着し、働く力となるためには、校内で学んだことを校外実習等で試し、また、課題となった点を再度、校内で学んでいくという双方向での学びを継続的に行っていくことが大切になってくる。この点から、今回の事業のような様々な視点や資源をいかに有機的に関連付け、「働く力」に結び付けていくのが今後の課題でもある。

この3年間の取組の中で、地域の協力企業との連携を図り、着実につながりを深めてはきたが、今後も、協力企業数を増やし、地域資源を活用した積極的な連携を図るとともに、つながった関係団体等に広く生徒の実態等を公開し、実習等の継続した受入れのための広報活動を一層推進していく必要がある。その意味でも、就労支援コーディネーターが要であり、ジョブコーチとしての役割も担う必要がある。ジョブコーチが、一般就労を目指す生徒の実習等に同行し、実習中の援助を行うとともに、生徒の様子から就労に向けた課題等を把握する他、企業に対して障害のある人を雇用する際の環境整備や支援方法等の理解啓発を行うようにする。

また、近年、軽度の発達障害のある生徒の進路が課題となっている。手帳の有無により実習先が制限されるため、本人及び保護者に障害の理解及び適性に即した進路指導を進めなければならない。進路指導は、児童生徒と保護者が将来の姿をイメージし、その実現を

目指すことにある。そのためには、早期から、小・中・高等部と一貫した取組、発達段階に応じたキャリア教育の推進が大切である。特別支援学校が取り組んでいるキャリア教育を中学校・高等学校へも情報発信する等の取組も継続していく必要があると考える。

今年度の本事業における取組を生かし、就労を目指す生徒を支援するネットワークの更なる構築に向け、本市としての取組の充実を図って生きたい。

Ⅲ 文部科学省への提案

- ・ キャリア教育・就労支援等における充実事業における補助費を、今後も継続的に措置していただきたい。

Ⅳ モデル校の概要

モデル校－１

(１) 学級数・生徒数（平成 28 年 5 月 1 日現在）

学校名：北九州市立特別支援学校 北九州中央高等学園

	生徒数								計	
	第 1 学年		第 2 学年		第 3 学年		専攻科			
	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
視覚障害										
聴覚障害										
知的障害	49	5	48	5	46	5			143	15
肢体不自由										
病 弱										
重複障害										
計	49	5	48	5	46	5			143	15

(２) 教職員数（平成 28 年 5 月 1 日現在）

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	計
1	0	1	1	0	24	0	1	
養護助教諭	栄養教諭	講師	ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	その他	計
0	0	10	0	0	2	1	3	44

(３) モデル校の特色

- ・ 北九州唯一の高等部単独の軽度の知的障害を対象とした就業を目指す特別支援学校である。
- ・ 学校の特徴として以下の 3 点が挙げられる。
 - ① 基礎学習（教科の学習）や社会生活学習を通して、実際の生活場面に生かせる力と豊かな人間性を育成している。また、作業学習を通して幅広い社会人・職業人としての知識・態度や就業に関わる実践的な技能を習得させ、自立できる力を育成している。

- ② 本格的な機器を使用した作業学習を行うと共に、企業等の専門家を活用し、専門的な技術指導を受けている。
- ③ 作業学習の1年次は、自分の適性に合ったコースを選択させるために、4コース全てを体験させるようにしている。生徒は、教師や保護者と相談して、自分で2年時以降の作業コースを選択し、専門的な技術指導等を2年間かけて学ぶようにしている。

モデル校ー2

(1) 学級数・生徒数（平成28年5月1日現在）

学校名：北九州市立小倉北特別支援学校

	生徒数								計	
	第 1 学年		第 2 学年		第 3 学年		専攻科			
	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
視覚障害										
聴覚障害										
知的障害	9	2	21	3	16	3			46	8
肢体不自由										
病 弱										
重複障害										
計	9	2	21	3	16	3			46	8

(2) 教職員数（平成28年5月1日現在）

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	
1	0	1	0	0	11	0	1	
養護助教諭	栄養教諭	講師	ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	その他	計
1	1	0	0	0	2	1	3	22

(3) モデル校の特色

- 知的障害の特別支援学校であり、同校の中学部と中学校の特別支援学級等からの進学者が在学している。キャリア教育の視点から生徒の実態に沿った授業づくり・授業改善を通して、系統的・組織的な教育課程の構築を図っている。
- 高等部の学習の中心となる作業学習では、1年間を前期・後期に分け、全員が2年生までに4つ（陶芸・木工・園芸・手芸）の作業を経験し、3年生で自分にあった作業班を選び、1年間を通して学ぶ。

モデル校－3

(1) 学級数・生徒数（平成 28 年 5 月 1 日現在）

学校名：北九州市立小倉南特別支援学校

	生徒数								計	
	第 1 学年		第 2 学年		第 3 学年		専攻科			
	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
視覚障害										
聴覚障害										
知的障害	20	3	36	5	25	4			81	12
肢体不自由										
病 弱										
重複障害										
計	20	3	36	5	25	4			81	12

(2) 教職員数（平成 28 年 5 月 1 日現在）

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	
1	0	2	3	0	17	0	1	
養護助教諭	栄養教諭	講師	ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	その他	計
0	1	1	0	0	2	3	3	34

(3) モデル校の特色

- ・ 知的障害の特別支援学校であり、同校の中学部と中学校の特別支援学級等からの進学者が在学している。
- ・ 高等部の目指す生徒像として、「自分のことは自分でする意欲的な生徒」「好ましい人間関係が築ける生徒」「進んで学習や作業に取り組み、卒業後の自己の社会参加を考える生徒」とし、授業実践に取り組んでいる。

モデル校－４

(１) 学級数・生徒数（平成 28 年 5 月 1 日現在）

学校名：北九州市立八幡特別支援学校

	生徒数								計	
	第 1 学年		第 2 学年		第 3 学年		専攻科			
	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
視覚障害										
聴覚障害										
知的障害	21	4	22	4	23	4			66	12
肢体不自由										
病 弱										
重複障害										
計	21	4	22	4	23	4			66	12

(２) 教職員数（平成 28 年 5 月 1 日現在）

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	
1	0	2	0	0	11	0	1	
養護助教諭	栄養教諭	講師	ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	その他	計
0	1	1	0	0	2	1	3	23

(３) モデル校の特色

- ・ 知的障害の特別支援学校であり、同校の中学部と中学校の特別支援学級等からの進学者が在学している。
- ・ キャリア教育の視点を生かし、生徒の発達段階や障害の状況、特性等に応じた指導を充実するため、全校体制で各教科等の指導目標及び指導内容・方法、指導体制を見直し、授業実践と評価を行っている。
- ・ 高等部生徒の実態の変化に対応するため、教育課程の見直しとより教育効果のあがる学習グループ編成を行い、指導実践を充実させている。産業現場等における実習や作業学習等、卒業後の社会生活を見据えた職業教育の充実を図り、1 年生からの系統的な職業指導を行っている。

モデル校－5

(1) 学級数・生徒数（平成 28 年 5 月 1 日現在）

学校名：北九州市立小池特別支援学校

	生徒数								計	
	第 1 学年		第 2 学年		第 3 学年		専攻科			
	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
視覚障害										
聴覚障害										
知的障害	9	2	8	2	8	2			25	6
肢体不自由										
病 弱										
重複障害										
計	9	2	8	2	8	2			25	6

(2) 教職員数（平成 28 年 5 月 1 日現在）

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	
1	0	1	0	0	9	0	1	
養護助教諭	栄養教諭	講師	ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	その他	計
0	1	10	0	0	2	1	3	29

(3) モデル校の特色

- ・ 知的障害の特別支援学校であり、同校の中学部と中学校の特別支援学級等からの進学者が在学している。また、隣接している障害児入所施設「小池学園」からの通学生もあり、多様化する生徒の実態に即した対応を行っている。
- ・ 「社会参加を目指したキャリア教育の取組 ―小池キャリア実態把握表を活用した授業改善―」をテーマに授業実践と改善を推進している。

モデル校－6

(1) 学級数・生徒数（平成 28 年 5 月 1 日現在）

学校名：北九州市立門司総合特別支援学校

	生徒数								計	
	第 1 学年		第 2 学年		第 3 学年		専攻科			
	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
視覚障害										
聴覚障害										
知的障害	17	3							17	3
肢体不自由										
病 弱										
重複障害										
計	17	3							17	3

(2) 教職員数（平成 28 年 5 月 1 日現在）

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	
1	0	1	0	0	7	0	0	
養護助教諭	栄養教諭	講師	ALT	スクールカウンセラー	事務職員	司書	その他	計
1	0	2	0	0	2	0	3	17

(3) モデル校の特色

- 平成 28 年度開校した知的障害教育部門・病弱教育部門をもつ特別支援学校である。
1 年生より入学し、平成 30 年度に 3 学年が揃って学習が進められるようになる。
- 市内で初めてコース制（職業専門コース・作業学習コース・生活学習コース）を設定し、障害の程度及び生徒の予想される進路先等を考慮した学習を実施している。
職業専門コースの作業内容についても、年次進行で作業学習班を開設する方向である。
- 知的障害教育部門には、小倉南特別支援学校中学部と中学校からの進学者が在学している。
病弱教育部門は、中学部までで、知的代替のコースも設け、多様化する生徒の実態に即した対応を行っている。生徒の卒業後については、高校等への進学者が多い。
- 社会参加・自立を目指し、自分らしく生き生きと学び続ける生徒の育成を目指し、主体的な活動を重視した指導方法や指導体制の工夫改善を行い、きめ細やかな教育の推進を図っている。

V 連絡担当者

(1) 都道府県教育委員会／都道府県私立学校主管課／国立大学法人附属学校主管課／学校法人担当課

①名称	北九州市教育委員会
②住所	〒803-8510 北九州市小倉北区大手町1-1
③連絡先	電話番号（代表）(093)582-2367 （内線 ） （直通） FAX 番号 (093)581-5873 E-mail （代表／担当者） kyou-shien@city.kitakyushu.lg.jp ryouko_miyamoto01@city.kitakyushu.lg.jp
④事業実施担当者名	所属・職名 指導部特別支援教育課 指導主事 宮基 量子

(2) モデル校 （複数ある場合は枝番で記入してください）

モデル校－1

①名称	北九州市立特別支援学校 北九州中央高等学園
②住所	〒804-0093 北九州市戸畑区沢見1-3-47
③連絡先	電話番号（代表） （内線 ） （直通）(093)861-0112 FAX 番号 (093)861-0114 E-mail （代表／担当者）
④校長名	入尾 忠之
⑤事業実施担当者名	厚田 昌博

モデル校－2

①名称	北九州市立小倉北特別支援学校
②住所	〒803-0846 北九州市小倉北区下到津4-3-1
③連絡先	電話番号（代表） （内線 ） （直通）(093)592-2103 FAX 番号 (093)592-2104 E-mail （代表／担当者）
④校長名	緒方 美加子
⑤事業実施担当者名	中島 正継

モデル校－３

①名称	北九州市立小倉南特別支援学校
②住所	〒802－0816 北九州市小倉南区若園 4－1－1
③連絡先	電話番号（代表）（内線） （直通）（093）921-5511 FAX 番号（093）921-3766 E-mail（代表／担当者）
④校長名	奥田 まさ子
⑤事業実施担 当者名	鬼塚 久美子 池田 光則

モデル校－４

①名称	北九州市立八幡特別支援学校
②住所	〒806－0047 北九州市八幡西区鷹の巣 3－7－1
③連絡先	電話番号（代表）（内線） （直通）（093）641-8675 FAX 番号（093）641-3738 E-mail（代表／担当者）
④校長名	山本 康子
⑤事業実施担 当者名	松尾 光芳 有田 玲子

モデル校－５

①名称	北九州市立小池特別支援学校
②住所	〒808－0132 北九州市若松区大字小敷 583－1
③連絡先	電話番号（代表）（内線） （直通）（093）601-1298 FAX 番号（093）601-1299 E-mail（代表／担当者）
④校長名	山口 典子
⑤事業実施担 当者名	岩井 和弘

モデル校－６

①名称	北九州市立門司総合特別支援学校
②住所	〒800－0006 北九州市門司区矢筈町 13－1
③連絡先	電話番号（代表）（内線） （直通）（093）372-6631 FAX 番号（093）372-6632 E-mail（代表／担当者）
④校長名	金田 孝一
⑤事業実施担 当者名	平岡 朗